風景の中で 6

KILLING THE BOOKS

図書館長　井上 郷子

KILLING THE BOOKS … この物騒で衝撃的な言葉は、チェコのアーティスト、ミラン・クニザク（Milan Knizak、1940-）によって制作されたパフォーマンス作品のタイトルです。1965年から70年にかけて作られたこの作品のイヴェントスコア（作品や上演についての指示書）には、by shooting by burning by drowning by cutting by gluing by painting white, or red, or black etc.　と記されています。

書物を殺す … これはパフォーマンス作品ですから、演者は実際に、人々の目前で書物を何らかの方法で亡き（無き）ものにします。いったい、ミラン・クニザクは、何を考え、感じていたのでしょうか。作品は時代の落とし子ですから、1960年代後半の世界の在り様とともに、彼女の内面に思いを馳せてしまいます。

言うまでもなく書物は人間の「知」の集積。それを（亡き）無きものにする、ということは「知」を破壊すること。このショッキングなタイトルは、長い歴史の中で実際に行われたいくつかの“KILLING THE BOOKS”をいやでも思い起こさせます。古くは、秦の始皇帝時代の「焚書坑儒」、そして、1933年のナチス・ドイツによる焚書。「焚書」とは、権力による組織的で大規模な言論、思想統制の1つですが、これは、ナチス・ドイツが、ナチズムの思想にあわないとされた書物を儀式的に焼き払ったもので、ナチズムを信奉する学生たちによって、25000巻以上の「非ドイツ的な」書物が燃やされたと言われています。「儀式的」というのは、学生たちはたいまつを掲げて行進し、広場で、バンド演奏「火の誓い」に合わせて、集められた本をかがり火の中に投げ込んだ、そして、これを機に、国家による検閲、文化の支配が、公然と、行なわれるようになった、という意味を含みます。恐ろしいのは「知」を誇る３４もの大学の教授、学生自らが焚書の実行者となったことです。

このとき、詩人、ハインリヒ・ハイネの書物も火の粛清を受けました。驚くべきことに、これより100年以上も前、ハイネは書いています。「焚書は序章に過ぎない。本を焼くものは、やがて人間も焼くようになる。」

つい先日、香港では「香港国家安全維持法」が制定され、域内の図書館では、もはや反体制派の書物を借りることすらできなくなっています。“KILLING THE BOOKS”は決して遠い昔、遥かなる場所の記憶ではないのです。

資料の部屋 6

朝ドラの人　古関裕而

図書館員　高橋 京子

4月からNHK朝の連続テレビ小説『エール』が始まっています。皆さんもご存知の作曲家古関裕而の生涯をドラマ化したものです。1964年の東京オリンピック入場行進曲《オリンピック・マーチ》を作曲したので、今年行われるはずだった東京オリンピックに合わせた企画でした。もしかして、皆さんの出身校の校歌作曲者だったりしませんか？結構、私たちの身近にも彼の作品は溢れています。このドラマをきっかけに、プロ野球チームの応援歌も多数手がけていたことを知りました。

奥様である金子さんと国立音楽大学もちょっとだけ関りがあったようです。本学教授になる前の、ベルトラメリ能子先生に師事されたそうです。

「朝ドラ」をきっかけに、続々と古関裕而関連本が出版されており、現在目録作成中も含めると十数冊の新刊が当館にも届いています。タイトルや副タイトルには、エールにちなんだ「勇気」「励まし」などが含まれており、こんなコロナ禍の時なので「音楽の力」を実感させられますね。昭和の音楽シーンを牽引したといっても過言ではない作曲家、古関裕而さんの書籍をどうぞ手に取ってみてください。昭和初期の音楽界や、詩人との関りなどを知る手掛かりにもなりそうです。

～関連本の一部をご紹介～

古関裕而：流行作曲家と激動の昭和　請求番号●J136-082

鐘よ鳴り響け：古関裕而自伝　請求番号●J136-283

古関裕而：日本を励まし続けた応援歌作曲の神様
請求番号●J136-445

古関裕而応援歌（エール）の神様　請求番号●J136-454

君はるか　請求番号●J136-543

古関裕而の昭和史：国民を背負った作曲家　請求番号●J136-636

＊他にもありますので、OPAC で検索してみてください。

たかはし　きょうこ　●　今年は、作曲家レハールの生誕150年。「メリー・ウィドウ」など、オペレッタで有名ですね。